

偶然という麻菓の香りの中で、どうにもならない現実には背を向けて、ただ不幸を美化するだけでは何の意味もなさないと言う現実と、そんな現実に対処する唯一の方法を漠然とも知ったから真剣に「結婚」を考えたが、年齢制限に気付いて愕然とした。

しかし、太陽の輝きですら分散させるスリガラスも雨に濡れると透けて見える。そのように愛の輝きをぼかしていた現実が残酷な破局を招く日がやってきた。

会う日、会う時間、会う場所は同じだったが、セーラー服は消えた。胸が膨らんだオレンジ色のセーターにグレーのミニスカートと黒いベルト。そして何よりも驚いたのは真つ赤な唇。大人の冬見が待っていた。化粧した美しさに圧倒された。

それは高校二年生の紅葉まつただ中の秋だった。

いつもなら冗談から始まる会話が始まらなかつた。いつもなら手を繋ぐだけなのに冬見は俺の腕を取った。いつもなら二駅ほど歩いて別れるのに、生駒の山へと向かつた。

山は燃えていた。でも冷たかつた。見つめ合う胸の中には愛情が、そして外では無情が流れていた。枝から離れた木の葉が空間に漂ってから一瞬静止してゆっくりと落ちるような人生で一番辛い経験、そう、初恋が失恋となる瞬間が訪れた。

「私ワタシ、もしももしもわれるの」

*

朝、速達を受け取った。すぐさま伊丹へ向かつた。花巻に接続する飛行機で羽田まで来た。

その十六 訪れ

雨が上がった。傘を閉じて神戸を見下ろす坂道を登って大学に向かう。六甲風ろっこうおろし——神戸の街は六甲山地の吹き降ろしの中にあるから透明感がある。今は夏。六甲風が心地よい。見上げれば粘る梅雨空を吹き飛ばして、まるで夜明けのように見える。

モリ・P R・コーポレーションとの関わりを完全に断ち切るために豊中市役所を退職した。そもそも広報課に配属されたのが誤りだった。今はアルバイトの身。遅刻せずに通学できる。

昼間課程ならとつくに夏休みだけど、夜間課程は時間割が窮屈なので夏休みが短い。

知秋チアキとは結婚まで行かなくても交際が続いていたら一緒に通っていたかも知れない。でも、彼女はすべてを断ち切って退学した。その気持ちは今よく分かった。

さて、今の俺には講義を聴くのが一番の慰み。アルバイトを終えて狭い部屋でアルコール漬けになるより、一番前の席で講義を聴きながら眠りこける方がいい。ちなみに夜間課程では居眠りしても教授からとがめられる事はない。ただし、イビキはだめだ。

本学舎裏の学生食堂に直行する。財布から小銭が寂しい音をたてて掌に顔を出す。素うどんかきつねうどんか迷うけど、勇気を出して券売機の「キ」のボタンを押す。食券を盆に乗せて配膳口に立つ。「キ」とはきつねうどんのこと。俺は一生、きつねうどんを食べるたびに人生

の悲哀を感じ続けるだろう。夏だからざるそばか冷麺を食べたいがアルバイトの身、贅沢はできない。きつねうどんが限界だ。

この時期、しかも夕方、食堂の利用者は夜間学生だけなのでガラガラ。セルフサービスだから配膳口に近いテーブルに座る。冬なら七味をたっぷりと掛けるが、夏だからお冷やを注いでヌルくしてからズルズルと食べ始める。うどんを腹に収めると残った汁をすすする。

突然目の前に女子が座る。大きな眼鏡越しにニタリと笑う。見覚えがない。ダラダラと流れる汗を手の甲でぬぐうと汁を飲み込むのも忘れて見つめる。

「とぼけて、ア・タ・シ」

——美英子！

驚きのあまり汁が一気に流れ込んで咳き込む。そして噴水のようにプワーと汁が飛び散る。

「キヤア！」

美英子が飛び退く。閑散としてはいえ視線を集める。

「ゴッ、ゴホ、ゴホッ……」

立て続けの咳で息ができない。

「大丈夫？ どうしよ。ごめん。これ……」

涙でよく見えないが目の前のピンクのハンカチをもぎ取ってトイレに駆け込む。

手洗い場に手を着いてハハハと息を継ぐ。吐こうとするが吐けない。そのときトントンと

背中を叩かれた。同時に蛇口ジャズから水が出てきたので両手で水を溜めて口をゆすぐ。そしてピンクのハンカチで汗と涙と口元と手を拭く。鏡を見ると男子トイレなのに女子の顔が映っている。

——髪を切った？ オマケにオバケ眼鏡！ 怪獣ミエゴン？

トイレを出る。咳は止まらない。涙も止まらない。声も出ない。三重苦のなか食堂に戻る。

*

学舎の廊下を歩きながら必死に考える。でも美英子は横で平然としている。

「講義、一緒に受けてもいい？」

「なに、しに、きてん」

かすれた声だったが、何とかセリフにした。ピンクのハンカチで鼻をかむ。

「お札に」

「お札？ 何のや？」

今度はきちんと発音できた。

「何のやて……言われても……」

階段を上り始める俺の頭の中で「なぜ」が何発も爆発する。

「怒ってはる」

そう！ 俺は怒ってるのだ。返事なんかするかと講義室のドアのノブをひねる。

「アタシ……ここで待ってる」

急に美英子の声から勢いが消える。気にせず足を踏み入れたが薄暗い。

——二階と三階を間違えた！

後ずさりする。横からしつかりと覗いていた美英子が叫ぶ。

「休講や！」

「講義室、間違えただけや」

再び階段を上り始めると腕を取って誘惑してくる。

「ねえー、さぼろー。サボろーよ」

階段を数段上ったところで強く引つ張られた。力負けするわけないが一段下りると美英子は二段下りる。すると、どうしたことか俺が先に階段を降り始めた。

「ウチ……じゃない、アタシのこと、褒めて」

「ほめる？」

「ウン」

ついに一階まで来てしまった。

「……アタシ、方向音痴やんか。けど、ここまで来たんよ。車で。免許とつたん！ 昨日」

「えー！」

免許取り立てで大阪からここまで来たことに驚く。でも「褒めて」とはどういうこと？
手を離すと美英子は食堂横の駐車場に向かう。逆光で髪の毛は輝き、それを意識したような

優雅な足取りで白い車に近づく。

「兄貴の車。買ったんは兄嫁やけど」

キーを差し込み乗り込む。ドアを開けたままジーンズの裾を折ると、かかとの高いサンダルを脱ぎ座席下に入れる。そして俺の顔を見て「クスッ」と笑うとハート型のペンダントが光る。「今日は、美英子教授の講義を受けなさい」

返事の代わりにドア越しにピンクのハンカチを返そうとする。

「そんなハンカチ、いらん。あげる」

ばつが悪い。ベチョベチョのハンカチを丸めて尻のポケットに押し込む。

「何の講義や」

美英子は尻を下げて再び「クスッ」と笑う。

「決まってるやん。恋愛論や」

「恋愛論？」

ここは凌ぐ。

「お茶でも飲もか」

「大学に喫茶店あるん？」

返事せずに食堂横の購買部へ向かう。喉を潤したいのと気を落ち着かせる時間を稼ぐために。もう小銭は底をついていた。小さく折りたたんだ五百円札しか残っていない。瓶詰めのコーヒ

「牛乳を二本買う。車に戻って手渡すと助手席に乗り込み後部座席に鞆を置く。」

「なんや。コーヒー牛乳やんか」

キョトンとしながら美英子は蓋をていねいに摘まみ上げてそのひとつをくれる。一緒にゴクゴクと飲む。

「冷たくて美味しい！」

吐いた後だから確かにうまい。この隙を狙われた。

「ここ個室喫茶や。なんでも話せるね」

*

「夕焼けになりそうや」

息苦しい個室喫茶から開放的な海辺に逃げることにした。大学の敷地を出るまでは一本道だから道案内の必要はないが、急な下り坂で曲がりくねっている。夕方だから終点の六甲団地行の市バスがひっきりなしに走る。途中、農学部前、工学部前、本学部前などのバス停がある。道幅が狭いから美英子はバスとすれ違うたびに車を止める。黙って前を見たままたどたどしいハンドル操作を繰り返す。

「何の札か知らんけど、その前に、何か忘れてへんか？」

と言ってから、しゃべりかけないのが無難と、口にチャックする。

——ほんまに運転してきたんやろか。兄貴か、兄嫁か知らんけど、よう車、貸したもんや

ようやく大学の敷地を出た。

「これ、左？」

「ウン……」

美英子はハンドルを切ってから、シフト・ダウンせずにアクセルを踏む。

「アタシ、何か……」

エンジンがゴロゴロと音をたてる。ノッキングを起こして車体がガクガクする。

「あっ！」

慌ててクラッチを踏んでシフトを下げる。すると車は加速して交差点に突っ込む。

「ブレーキ！ ブレーキ！」

裸足で踏ん張る。

「ギャンギャン、言わんといて！」

車は次の赤信号——橋詰めの交差点手前で停止する。

「フー。えーと……忘れる？ ウチ……じゃない、アタシ、何を……」

「いや、もう……よろしいですわ」

「あ、そう……」と言いながら急に声量を上げる。

「キレイ！ 見て」

切れ切れになった灰色雲の間からのぞく陽光の上方にオレンジ色に染まりかける布団のよう

な雲が被さっている。夕焼けの前ぶれだ。後ろからクラクションが鳴る。美英子は右折のウィンカーを出して交差点の真ん中に出る。対向車が切れるのを待ちながら恐らくズーツと我慢していた質問をする。

「守君の会社、なんで辞めたん？」

「黙って運転しろ！ 曲がれ！ 曲がれ！」

信号が黄色になってやっと右折した。車は川の左岸を海に向かう。

「喧嘩したん？」

瞬間的に動揺と疑問が俺を包む。前方と美英子の横顔を見ながら尋ねる。

「守から聞いたんか？」

「聞いてへん。でも、ウチ……じゃない、アタシ、知ってんの」

「知ってる？」

「知ってんの」

——なにを？ 夏子の事？ まさか……

動揺するが次の口撃を避けるために話題を変える。

「なんで髪の毛、切ったんや」

「ひねくれてやろうと……」

いつもの事だが独特の言い回しに翻弄ホシロウされる。

「ウソ。長いと散髪代、高いん」

「高い？ 金に糸目つけへんのと違うんか」

長い黒髪が似合うのに、もったいない。

「これには、長ーい、深ーい訳があるん」

*

俺は友情を金銭に両替したあの分厚い封筒をそのまま返した。始めから守が心底打ち明けてくれたら元々不用な金だ。しかも美英子との関係がうまくいく、いかないに関わらない金だ。そんな金がなくても生きていく自信はある。

今、美英子を目の前にして改めて思いをはせる。失恋からの逃避の対象としていたのでもなく、愛しているのでもないけれど、嫌いじゃない。

——何をかっこつけているんや。好きに決まっている。だから踏ん張っている
改めて美英子の横顔を確認する。

——待てよ。大阪から命がけで来た。踏ん張ってるのは美英子の方や

「まだ、怒ってるん？」

言葉が途切れていた。いつの間にか外は真っ赤に染まっている。

「キレイやな」

車は堤の先端まで来ていた。これでもかというほど周りすべてが赤い。

「こんな夕焼け、見た事あれへん。今日はいい事、ありそう……あつて欲しい」

視線が合うと美英子の目が潤んでいた。

「ねえ……ウチ……違う……アタシの事、腹立つんでしょ？」

俺は取り繕う事も忘れて頷いてしまふ。しかし、美英子はたじろぐ事なく続ける。

「だったら気が済むようにして……叩かれてもかまへん。悪いのはアタシやから……」

運転用のオバケ眼鏡を取って俺を真正面から直視する。叩くなんて思いもよらないから、手より先に口が出た。

「何のために来た？ どつかれに来たんか？」

——確かに美英子の方からやって来た！

「ううん。お礼に……」

「もう何度も聞いた」

「心から御礼を言いたいん。でも聞いてくれへん……」

「どう言う意味や」

「なんで？ なんで分かってくれへんの」

首を少し傾けたので涙が一滴こぼれてはじけた。

「黒馬で……助けてくれた事、何も言うてくれへんかったし、会社辞めて、まるでウチ……いえ、アタシ……もうエエ……やっぱり、ウチはウチや。ウチで通す……えーつと何……ウチ、

何、言おうとしてたんやろ……」

小さなしゃつくりを二度繰り返してから言い直す。

「せや。ウチから逃げるみたい……」

「こんな札の言われ方、されるんやったら逃げたくもなるやろ」

「違う！ 違うやんか。どうして、なんで、言ってくれへんかったん？」

「何を？」

「もう！ 助けてくれた事やんか！」

「助けたんは守モリや」

「守君と一緒に落ちてへん！ ウチはマモルと一緒に落ちたん！」

「心臓マツサージしたんは守や。俺は横でポーツと見てただけや」

「なんでそんな言い方するん！」

美英子が涙を蒸発させる。

「守に気があるんやから、それでエエやんか」

「エー！ どういう事！」

言葉に力があつたが、うつむきながら出した声は小さかった。逆に俺は大きな声を出す。視線を戻されてもためらわない。

「守モリの誘いやつたら、いつでも尾っぽ、振って……」

「違う！ マモルに会えると思つて上町さんに付いて行つただけ……」

声は小さいまま。半分聞き取れなかったが突つ込む。

「見えすぎた芝居に騙されへん！ 松本まで送つた時、守が結婚するつて言うたら、ショックで黙り込んだやないか」

美英子はこれ以上見開いたら目玉が落ちてしまふぐらい目を膨張させる。

「結婚！ ！ ！ ！ ！ ！」

美英子はブチッブチッと音をたてるように言葉を切る。でも、すぐ目を閉じて沈黙する。

「！」のカウントダウンが済んだのか目を開けて斜下から俺を見つめる。今度はかすれた声を出した。

「芝居なんかしてへん……ショックやつたん……マモル……マモルやん」

「うっ！」

素足が俺を捕らえて放さない。美英子は言葉を探しているのか、間を置く。

「守君……結婚したん？」

黙つて頷くと聞き取れないほどの声が流れる。

「夏子さん……守君に取られたんやね」

たまらずドアを開けて降りる。思いつき強くドアを閉めると、決定的な決裂を決意して、足早に遠ざかる。

もう一つ閉まるドアの音と同時に「待ってえ」と言う声がする。音もたてずに追いかけてきて俺の腕を取ろうとしたとき反射的に頬を引つ叩いた。

「お前って言うヤツは！」

美英子が向こう向きに倒れる。

——六甲駅に呼び出しておきながら来なかった。それがどうだ！ 鋭いナイフを隠し持って切りつけてきた。今日は一体なんという日や！

夏なのに、六甲嵐の風は白い。霧のように。脇腹の傷がうずく。

*

車に戻って鞆を取り出す。美英子はほんの十メートルほど後で、背中をこちらに向けて倒れていた。軽く叩いたが殴ったわけではない。でも動かない。

振り返って美英子の全身を見つめる。素足。細い足首。裾を折ったジーンズ。くびれたウエストと丸いヒップ。背中を向けているから本人が断言した成長の止まった胸は見えないけど……少し張った肩……スレンダーだがすべて女子そのもの。

忍び足で戻る。数歩近づくと心持ち足早になる。最後の一步は地面を叩く。期待した——勝手に想像した。ニコッと立ち上がる美英子を。しかし、まったく動かない。当てが外れて立ちん坊になる。そして声が勝手に離れていく。

「帰り、事故でも起こしたらあかんと思うて……」

たどたどしい運転を考えると当然だが気持ちが悪くもってなかつた。後悔して屈むけど手を伸ばせない。するとか細い声がする。

「このままにして……泣き顔見られたくない」

恐る恐る肘の少し上を軽くつかむと顔の下から片方の手が出てくる。セリフの割には簡単に顔を上げた。潤んだ目、長いマツゲに夕焼け色の涙がぶら下がっている。

「帰るか……送る」

俺の手をつかんで起き上がるとペタンと座る。

「もう少し、ここにいたい」

美英子は遠くを見つめる。大きな夕陽が海に落ちかけていた。

「叩いて、ごめんな」

「ううん」と、くぐもった声を出す。

「悪いのはウチ」

今度は手を握りしめて立ち上がる。繋いだままゆっくりと歩き始める。どちらからともなく波打ち際の赤い赤い階段を下りる。海面から少し上のところで並んで座る。

美英子は緊張した空気を和らげようと微笑む。そして唇に人差し指を当てる。

「ウチ、なんで『アタシ』と言わんと『ウチ』って言うんか、わかる？」

慣れているとは言え予期せぬ質問に戸惑う。

『ウチ』やったらあまり口を開けずに声、出せるん。でも、『アタシ』やったら口を広げんと……わかる？ 唇、切れるん。一度言ってみて」

『ウチ』、『アタシ』……せやなあ

「ウチの唇、カサカサ病やから母音の『ア』が苦手。リップクリーム、塗るけど口紅塗られへん。せやからメイクせーへん。どーせ、ブスやからどうでもエエけど」

「そんなことない。キレイや……」

——髪の毛、長い方がキレイ。もったいない……でも短くても……

「……いや、可愛い」

「なんで言い直すん。ブスでも見慣れたら我慢できるって言ってくれたらエエやんか」

反応できない。美英子は俺をじっと見つめ続ける。俺は心の中で二回練習してから精一杯の声を上げる。

「じゃあ……見慣れた。可愛いブスや。こんな可愛いブス、生まれて始めて見た！」

美英子の瞳に涙があふれ出す。

「泣くなよ……ブスは俺や」